戸川幸夫動物文学全集 8

# 戸川幸夫動物文学全集 8

講談社

戸川幸夫動物文学全集8　膨脹ほか
昭和五十一年十月十八日　第一刷
昭和五十二年三月二十五日　第二刷
著者　戸川幸夫
装幀者　辻村益朗
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五一一一一(大代表)　振替東京八一三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©戸川幸夫　一九七六年　Printed in Japan

定価は外箱に表示してあります　(文2)

# 目次

膨脹 5
ライオン野郎 100
土佐犬物語 131
羆の村 159
ネッシー浮上す 186
黒い流星 210
人喰い虎 231
氷の牙 244
サバンナは挽歌に暮れる 259
不幸なルーファス 280
祖父の狼 297
羆と罐詰 314
影の影 326
解説・尾崎秀樹 345

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

# 膨

# 脹

# 第一部

## A

膨脹――この言葉が一般に使われているような、単なる「ふくらみひろがること」と謂う意味でなら、それほどまでに私を惹きつけはしなかっただろう。

だが、私たち科学、特に動物学にたずさわる者たちの間で使用されている場合は、まったく別な意味をもつ。

エクスパンション（EXPANSION）と、私たちはふつう原語で言っているが、それは膨脹といった程度の生やさしい邦語訳では、完全に表現することができないからである。

では一体、エクスパンションとは何なのだ？　という質問が出るだろう。

私たちが好んで使っているエクスパンションには「爆発的な増殖」「異常なる増殖」という意味がある。

異常にして、爆発的な……というところに意味があるのであって、一般的に使われる「膨脹」には、そういった激しい感情（ニュアンス）が含められていないので、われわれには不満なのである。

生物、特に動物には爆発的で異常な増殖をするものが幾つかある。

身近なところに例をとってみるなれば、日本に入ってきて、彼らにとっては処女地だった日本の気候風土が居心地がよいのか、大増殖をして、すっかり居ついてしまったものに俗にエビガニといわれているアメリカザリガニがいる。また庭木や街路樹に大害を与えたアメリカシロヒトリがある。これらは局地的なエクスパンションの例だが、全世界的なものとしては、ネズミ族の繁殖がある。

私は、どうしてだか自分にもよく解らないが、ネズミ族に対して非常な好奇心と興味を子供のころから抱いていた。それは私がまだ幼稚園に通っていたころに、祖母が動物好きな私を喜ばせるために、縁日でハツカネズミを一つがい買ってきてくれたことに関係があるのかもしれない。

そのハツカネズミの夫婦は、間もなく何匹も子供を産み、家族をどんどん殖やしていった。母はその世話に困って、とうとう私の居ない間に、人に与えてしまった。

だが、よく考えてみると、私のネズミへの好奇心は、祖母がハツカネズミを買ってくれたから生じたものではなくて、その以前からあったようである。私が幼時を過した家の隣りはパン屋で、店のうしろはパン工場になっていた。

従ってそこにはネズミが多かった。職人が空気銃を構えて、壁の穴から顔を覗かせるネズミをパチンパチンと撃っては自慢そうにぶら下げて、なん度も見せてくれたのを記憶しているのだから、やはりそのころネズミ退治を見るのを楽しみにしていたのかもしれない。

私のネズミへの興味はその後も消えることなく続いた。中学生の頃は、私はネズミに関するいろいろな本を買い求めて、読んだ。

「あんな穢いものに、なんでまた……」

興味を持つのだろう、と両親は眉をひそめていた。もちろん、私はペットとしてネズミに興味を持っていたのではない。私が惹かれたのは、ネズミが持つ旺盛な繁殖力と適応性、そしてその知恵と行動であった。もう一つ大きなことをつけ加えるならば、彼らが撒き散らす害毒についても大いに興味があった。

私が、二年の浪人生活を送ってまでも東方大学理学部への入学を固執したのは、同大の教授にネズミ博士とまで言われた権威者の黒沢孫市博士が居られたので是が非でも同教授の講義を受けたかったからだ。

ところでネズミとは何であろうか？　どのようにして地球上に現われ、進化をとげてきたのであろうか？　これからお話しする怖ろしい物語の前にこのことはどうしても知っておいてもらいたいので、ちょっとお時間を拝借する次第である。もちろんネズミは人類よりはずっと以前に地球上に出現した動物であるから、われわれとしては、その発生や進化の過程については、与えられた研究の範囲内で推測するしかないわけだが、先人の研究はそう的を外れているとは思えない。

ネズミは、ウサギやリスなどと同じ齧歯目の動物である。齧歯目は今日地球上に生息する獣類三千七百余種の約三分の二を占めていて、三つの亜目に分れる。即ちリスの仲間、ヤマアラシの仲間、ネズミの仲間である。

齧歯類が地球上に現われたのは、哺乳類が出現した初期の頃（約六千万年前）だろうと推測されている。もちろん今日見られるようなはっきりしたものではなく、極めて原始的な齧歯類であったに違いない。そのあと永い年月が過ぎリスともネズミともつかない齧歯類の祖先が新生代第三紀漸新世の頃（約三千五百万年から二千五百万年前まで）に旧大陸に現われて、まずキヌゲネズミを生じた。これが中新世（約二千五百万年前から千二百万年前まで）になって一部がベーリング地峡を渡ってアメリカ大陸へ行き、現在の南北両アメリカに繁栄しているネズミの祖先となった。またアフリカのマダガスカル島に迷いこんだものは、この島の中で閉鎖的進化をとげた。そしてアジアに留まったものは進化してキヌゲネズミ、ハタネズミ、ネズミの三群に分派した。この中で今日もっとも繁栄しているのがネズミ亜科で、われわれが一番よく知っている家ネズミ（クマネズミ、ドブネズミ、ハツカネズミ）もこの中に含まれてい

る。

化石による調査だとネズミの祖先は大型であった。それが進化するにつれて小型となり、多産になった。これはゾウの祖先が小型だったのが、だんだんと大型となり、その結果、繁殖率が非常に低下したのとまったく対照的で、こういうところにもネズミが私の好奇心を惹く十分な理由があるのだ。

さて、われわれに最も身近な家ネズミ、それもどこででも見られるクマネズミとドブネズミについてもう少し話してみよう。

この二種の家ネズミについて言うならば、クマネズミの方が先に地球上に出現している。クマネズミの原産地はインドやビルマ辺の熱帯地方であった。もともとこのネズミは山野や森林をすみかとするネズミだったが、いつしか人間に接近し、人家に寄生するようになったもので、インド文化の進出に歩調を合せて全世界に拡がっていった。インドの宗教や文化が東漸して中国に入ると同時に、クマネズミも中国大陸に侵入していった。インドの文化が西漸すると共にパレスチナに進出した。十二世紀になって十字軍の遠征があり、その遠征軍がヨーロッパに凱旋するとき、クマネズミたちは兵士の荷物と共にヨーロッパに渡った。そして十三世紀の半ば頃にはもうヨーロッパ各地でクマネズミの姿を見ないところはない、といわれるほどに拡がった。怖るべき膨脹ぶりである。そしてヨーロッパに侵入したクマネズミは、ヨーロッパ全土を死の嵐に捲き込んだ黒死病（ペスト）を持ち込んだのであった。このネズミがアメリカ大陸に渡ったのは一五四四年といわれている。

クマネズミのクマは動物のクマではなくて、色彩の黒いという意味だと、故岡田要博士は説いている。博士の説だと、

「クマネズミの体色は原産地であるインドやビルマでは黒くはない。クマネズミは元来が南国産なので、ヨーロッパに入った当初はシシリー島とか、せいぜいイタリア半島南部の温かい土地で野天生活をしていた。その後、人間のつくり出す食糧に惹かれて人家に入りこむようになり、冬は人家という避難所があるために北ヨーロッパの方へも進出していった。そして人家で暗闇の中の行動をするところから、毛の色もだんだんと黒化していったのである」

と。面白い見方だと私は思う。クマネズミは人家に侵入しない以前は樹上生活をしていた。従って木によじ登り、枝から枝へ渡るのは得意である。その性質は今日も残っていて、ロープや鎖や電線などを伝ったり、鴨居や梁の上を走ったりする、所謂（いわゆる）天井うらの生活をお家芸としている。彼らがロープを伝うときは長い尾で巧みに体のバランスをとり、あるときは巻きつけて渡ってゆく。この性質があるのでクマネズミは繋留された船にもぐり込み、全世界に種族を拡げていったのだ。このためにフナネズミの別名さえある。

クマネズミはこうして全世界に、彼らの王国を築き、わが世の春を謳歌していたが、それはいつまでも続かなかった。彼らよりは獰猛で、体も大きく、繁殖力の旺盛なドブネズミが出現したからだ。

ドブネズミの原産地は中央アジアの黒海沿岸からトボルスクに至る間の湿地帯とされている。しかし、その一族が今日でもバイカル湖附近で野生生活を続けているところから見ると、もともとどこか一つの場所で発生したのが分れてこれらの二つの場所に集結したものと考えられる。いずれにしても彼らがソビエット領のアジアから出現したことは疑いないところであろう。

一七二七年の九月に黒海に大地震が発生した。破壊された人家はドブネズミたちにより快適な住居を与え、混乱した人々の生活は、彼らに一時的ではあったにしろ多くの食糧を与えた。そこでドブネズミたちは繁殖していったが、やがて間もなく反動的に深刻な食糧の欠乏が始まり、そこに留まれなくなったドブネズミたちは大挙してボルガ河を渡ってアストラカン地方へと移動を始めた。記録によるとドブネズミの大群がアストラカン地方に侵入してきたのは、大地震の十年後に当る一七三七年のことだとある。

当然、ドブネズミの大襲撃を受けたアストラカン地方の人々は恐怖した。彼らが、この年を「ネズミの年」と呼んで、今日もなお語り伝えているところを見ても、その惨憺たる被害が想像できる。

ドブネズミたちは行く先ざきで異常なる増殖をくり返しながら、数年の間に広大なロシア原野を占領し、西ヨーロッパへと侵入してきた。そして一七五〇年にははやくも東プロシヤに達し、三年後にはフランスのパリに出現、一七五七年にはドーバー海峡を渡ってイギリスに上陸、別派は北上して一七六二年にヨーロッパの北西端ノールウェーに、さらにそれから十三年後には北アメリカに進出している。侵入したドブネズミたちは先住者のクマネズミを圧迫して大増殖し、一七八〇年には全ヨーロッパを蹂躙した。そして、このドブネズミ禍は人々の必死の駆除にもかかわらずずっと猛威をふるった。一八一六年の六月二十七日、当時飛ぶ鳥落とす勢いの英傑ナポレオン一世が、朝食のパンをテーブルの上からドブネズミに盗まれて、

「余に屈しないのはこいつだけじゃ」

と慨嘆したという話も伝わっている。

さてわが日本列島に家ネズミが上陸したのもクマネズミが先で、二世紀ごろだという。多分、朝鮮半島とわが国との間を往来する船にもぐり込んで渡ったものだろうと言われている。

ドブネズミが日本に上陸したのは、クマネズミよりずっと遅く（これは事実だろう）、大化の改新の頃か、室町時代の初期で、やはり朝鮮半島か、中国あたりから船にもぐり込んでやってきたといわれている。こんな話がある。中国から日本に仏典をもたらした僧侶たちが、途中で大切な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

経典をネズミに齧られては大変だと、ネズミに備えてネコをつれてきた。それが、ネコが日本に輸入された初めだ、というのだが、話としては面白いが、チト怪しい。ドブネズミ渡来説にしても、最近、青森県下北半島や愛媛、山口県下などの古い地層からその化石が発見されているから、ドブネズミが日本列島に来たのはもっともっと古いことらしい。中央アジアに発生したドブネズミたちが、全部が全部ボルガ河を渡ってヨーロッパに行ったわけではなかろうし、西に向うのと同じように東にも、南にも、北にさえも進軍したと思われる。とすると地理的に近いアジアや日本への進出は、ヨーロッパやイギリスよりも早い時代に行われたと見るのが妥当だろう。

まあ、それはそれとして、一七三七年にボルガ河を渡ったドブネズミが、わずか四十年も経たないうちに全ヨーロッパを席捲し、アメリカ大陸にまで進出したということは、怖るべき異常増殖といえた。

これこそ代表的なエクスパンションなのだ。今日、地球上に生息する三千七百余種類の獣類を見まわしても、このような現象は見当らない。しかも、この膨脹は一時的なものではなく、また点と線だけで大陸を通過していったのでもない。彼らは通過地域で、確実に繁殖し、そこに住みつき、その地域を自分らの領土として経営しながら拡がっていったのである。怖るべき力と謂えた。

しかし乍ら、これらのネズミ族が、これほどの大膨脹を遂げた逞しい原動力は、いったい何なのだろうか？　その根底をなすものは体軀を縮小し、寿命を短縮した代償として獲得した旺盛なる繁殖力であることに間違いない。だが、それだけのものであろうか……。ネズミ族に限らずあらゆる生物は、動物でも、植物でも自分の種族の保存と発展を望んでいる。それが意識のうちにあろうとなかろうと、動物たちはその本能に従って行動している。種族の発展は繁殖力に左右されることは確かだが、このドブネズミに見られるエクスパンションのような現象は単なる繁殖のくり返しだけで完成するというものではなさそうだ。

繁殖力のほかに環境への適応性や、天敵に対する防禦力の強いということ、病害に対しても抵抗力があるということ、この他にもいろいろな要素が加わっていると思うが、見のがしてはならぬことは、エクスパンションをやれる種族は、いずれも種族を単位として考えるときは「若い」ということである。ドブネズミの中には老いぼれたネズミも居れば、病弱なものもいるが、種族全体として見た場合、ドブネズミ族は、ネズミ族の中の青年なのである。ヤチネズミやケナガネズミなどが、種族として老衰期に入っているのに比べると、ドブネズミ類は、ボルガ河を渡河してからまだ二百三十九年しか経っていない。これは、永い種族の生命から考えると出発したばかりの、若い活力に満ちているものといえる。

これがドブネズミたちの発展を支えたといえよう。黒海

沿岸に発生した大地震による破壊と混乱の中で、彼らは大繁殖のきっかけを掴んだ。そこで進撃を開始した。その進撃路は五百年前に彼らの先輩に当るクマネズミたちが伐り拓いて通った道であった。しかもそれらの道すじにはそのときのクマネズミの子孫たちが住みついていた。

ということはクマネズミたちはネズミ族にとって怖ろしい天敵――イヌやネコやイタチやテンや、フクロウやタカなど――から滅亡させられないだけのバランスを保って生活していたということになる。病菌に対しても同様だった。そこへクマネズミよりも繁殖力の強い、強靱な生命力をもったドブネズミたちが侵入してきたのである。ドブネズミたちは、クマネズミ群を圧倒し、攻め滅ぼし、追い払っていった。ネズミの天敵たちは、ここぞとばかりドブネズミたちに攻撃を加えたに違いない。しかしクマネズミと漸くバランスを保っていたような勢力のあまり強大でない天敵はドブネズミの進撃をくいとめることはできなかった。ドブネズミたちは、仲間が殺られても殺られても、それに上回る生命力で、どんどんと殖え続けていった。そして確実に、一つの地域から他の地域へと占領を続け、それを自分の縄張りとして経営して、国土を拡大していったのだ。

このエクスパンションを援けたもう一つの要素としては、彼らの凶悪な獰猛性があると謂われている。

ネズミの仲間に限らず動物には縄張り根性があって、それを確保しようとする。テリトリイと呼ばれるその縄張りは、その動物（個体であれ、群体であれ）が生きてゆくために必要な食糧を得る地域なのである。一頭のトラが密林の中の一定地域を占有しているのは、その地域内にすむシカやレイヨウたちを捕食するからで、その地域内にいる草食動物を捉えることで十分に生活ができれば、そのトラはその地域だけを確保して満足し、ひとの領域まで荒らそうとはしない。これがテリトリイなのだ。ワシやタカが原野や森林の上空を、しかも決まった領域だけ飛翔するのは、その下の地域が彼のテリトリイだからである。群生するオオカミやハイエナは個体別のテリトリイはなくとも、群としてのテリトリイを持っている。

人間が所有している国土は、国民という群体が所有するテリトリイであり、各個人の所有する住居は、個体としての人間のテリトリイといえるだろう。人間のように高度の知能を持ったものには、テリトリイの必要性も、利害も複雑になっているが、動物たちの場合、テリトリイは多く食物に左右されている。

ドブネズミの凶暴さは、食物を争って親子の間で殺し合いも演ずるほどだ。しかも繁殖力が旺盛で、つぎつぎと子供を産み、その子供が短時日の間に成長してゆくから、テリトリイをめぐっての争いは絶えない。多くの場合、子ネズミは親ネズミに追い出されて、よその土地に行き、そこを開拓しなければならない運命にある。ドブネズミの仲間

が、居ついた場処から、その周辺地区へと、どんどん占領地域を拡大してゆくのは、こういったところに原因があった。

ドブネズミたちは自分らの仲間うちでは自分の息子さえも縄張りから叩き出してしまうという激しい排他的な闘争心を持っているが、この闘争心は外部の別の種類のもの、例えばクマネズミやハツカネズミに対しては団結して戦うという力となった。

彼らはクマネズミやハツカネズミを種族の敵として駆逐しようとつとめたので、勢力の弱いクマネズミやハツカネズミは次第に追いつめられていった。

とは言ってもクマネズミやハツカネズミとしても、種族保存のためにドブネズミたちに抵抗して生きてゆかなければならない。そこで彼らも仲間を団結させて対抗しようとする。

クマネズミの抵抗はドブネズミたちが、どうしてもついてゆけない自分らの特技を生かして生きることであった。ビルの高層に住み、ビルからビルへと電線をつたって往来することは、ドブネズミには不得意なのだ。

ふつうの家屋では、ネズミたちの生息範囲が狭いので、クマネズミはドブネズミに追っぱらわれていっているが、大きな家屋やビルでは、下の住みよい場所にはドブネズミ、上層のところや天井うらなどにはクマネズミが巣喰う。これを私たちは「住み分け」と呼んでいる。「住み分け」にはこのような地域的「住み分け」と、時間的「住み分け」がある。ドブネズミは、夜の更けはじめ、つまり夜の六時ごろから十時ぐらいまでと、暁方の午前四時頃が最も活発に活動して餌をあさる。この時間帯には、危ないのでクマネズミは出て来ないで、ドブネズミが休息している真夜中や、昼間に活動する。ネズミが夜間活動するのは昼だと外敵（人やタカなど）に襲われる怖れが多いからだが、ドブネズミの圧迫にたえかねたクマネズミにしてはそうは言っていられなくなって昼間出現するようになった。これを時間的「住み分け」というのだ。ドブネズミが美味しい食物の多い食堂だとか、温かい地下室などを利用すれば、クマネズミは寒い天井うらにひそんで粗食に耐える。ドブネズミが人間を極端に恐怖すれば、クマネズミは人間にある程度慣れ近づくことで対抗したのである。

さて、ここで私は動物の異常発生（PLAGUE）に話を移したいと思う。なぜなら異常発生こそ、この物語の主人公であり、私の畏友遠山洋平が命がけで成し遂げようとした研究テーマであったからである。

遠山洋平は私とは違って、なかなかの秀才であった。小学校から高校卒業までずっと首席で通したというくらいだから、もちろん東方大学へも、私のように受験浪人をしたわけでもなく、たった一回でパスしたのだった。

彼の父親は名古屋市で大きな病院を経営している医者だ

ったので、長男の彼に後継者となってもらいたかったらしい。彼の母親は、その兄が工学博士で建築界では第一人者として知られていたから、彼をその方面に進めたかったようだ。いずれにしても洋平ならば、どちらの道も思うがままに選べたであろうし、またその世界で名を馳せることも夢ではなかったろうが、彼は金にもならない動物学の道を選んだのだ。

だから洋平の動物学への熱意はなみなみならぬものがあったと言えるだろう。

私と洋平とは、机を並べて黒沢教授の講義を受けた。彼は浪人をしていないのだから少なくとも私よりは二歳は若いはずであった。あるいはもう一歳ぐらい年下であったかもしれない。それだけの年齢の開きはあったが、私たちは俗に謂うウマが合うというのか、仲が良かった。学問や研究ではお互いに猛烈に競い合いながらも、私的な面ではよく一しょに行動した。つまり良い意味でのライバルといえただろう。

私はあるとき彼に、

「動物学科を志望した僕がこんな質問をするのは馬鹿げているかもしれないが、君がこの大学の動物学科を志願し、黒沢先生の講義を受けることになった動機というのは何だい？　それほど、昔から動物に興味があったのかね？」

と質問してみた。彼はにやりと笑って、

「なぜ僕が動物学を志したかという質問には恐らく北川拓と同じ返事しかできないだろう」

といたずらっぽく答えた。北川拓とは申すまでもなく私の姓名なのだ。

「すると君もネズミの何かを研究するために黒沢先生の講義を受けているというのかね？　僕はネズミの繁殖や適応について研究したいと思ってるのだが、君も……？」

私は研究テーマが彼とぶつからねばいいがと思った。

「いや、ネズミの……というわけではない。僕は中学生のころにあることから、動物の異常発生について大変興味を惹かれたんだ。それが、ずうっと今日まで尾を曳いていると言っていいだろうね。

動物学者なら一応誰でもこのプラーグ（PLAGUE）についての知識はもっている。ところが、それなら異常発生はなぜ生ずるのか？　異常発生する動物としない動物とがあるのはなぜか？　ということになると何も判ってない。むろん、ゾウやクジラのような超大型の、一匹しか子供の産めない動物と、ネズミのような多産の動物とでは比較するわけにはいかないが、例えば同じネズミの仲間でありながら、異常発生をする種と、絶対にしない種とがあるのはなぜなんだね？　わが日本列島には約十四種類のネズミが生息しているが、異常発生するのは北海道のエゾヤチネズミ、本州や九州のハタネズミ、四国のスミスネズミ、それに家ネズミではドブネズミ――この四種だけだ。これはなぜだろう？

ササが開花して、その実が成熟するとハタネズミなどの野ネズミが大繁殖、つまりプラーグをするが、これは食物の量と関連して理解できる。家ネズミのドブネズミが環境さえよくなればやはりプラーグをする。それならドブネズミと同じような条件下にあるクマネズミになぜプラーグが生じないのだろう？

ということになると一切謎なんだ。異常発生と進化の関係はどうだ？　プラーグとエクスパンションの関係はどうだ？　となるとわからないことが多すぎる。

つまりこの学問は未発達だ。くわしいことは殆ど判っていない。だから、この分野を開拓したいと僕は思ってね……」

私は洋平の熱を帯びた口調にだんだんと引きつけられていった。

「君はさっき、なぜ僕が動物学に興味をもったのか、動機があるのか？　とたずねたが、それに答えよう。

動物学というよりも、異常発生というものに惹きつけられた動機なんだがね。

僕の家は今でこそ名古屋に在るが、もともとは北海道が郷里でね、父は日高の牧場、母は十勝の開拓農家で生まれた。

この辺りは、明治十三年から十八年にかけてバッタの異常発生があって、農作物の収穫は皆無だったといわれている。

むろん、僕の両親はそれよりずっと後に生れているから祖父母から聞いたのだろうが、それは凄じいものだったらしい。その話を聞いて僕は昂奮し、中学三年の夏休みに十勝、日高、胆振、虻田、石狩地方を歩き廻り、当時のバッタ害について調べたものだった。そのころ十勝あたりにはバッタを埋めたバッタ塚なるものが方々に残っていた。それに幸いなことにはまだ祖父母や両親のことを知っている古老も残って居たし親戚もあったから、いろいろと力をかしてくれた。そこで、中学生ではあったが僕はいろんな人から話を聞く便宜が与えられたんだよ。

ときに君、晩成社という名を聞いたことはないか？」

「くわしくは知らないが、明治の初めに北海道開拓を志して入植した人々のグループだろう？」

「そうだ。リーダーは依田勉三といって伊豆の豪農の伜だ。慶応義塾に学んで、なにか男らしい、国家に役立つ仕事をしたいと考えていた。この人が北海道に眼をつけた。明治十五年ごろのことで、当時の北海道はまだ蝦夷地時代のままで殆どが未開だった。彼は、この原始林を開拓しようと決意し、同志二十六人を募り、晩成社という開拓グループを結成して十六年の春、十勝に入植した。しかし、さて開墾を始めてみると想像に絶する困難つづきで、脱落して帰国する者があいつぎ、開墾は失敗した。だが、晩成社員の中にはそのまま居ついて北海道に残り、条件の良い土地を捜して、そこに移住し、開拓を続けた者もいた。実を

いうと僕の母の両親も――つまり祖父母だが――そういった家族だった。母は一家が帯広に移住してから生れ、そこで育った。だから母は両親から、初期開拓時代の苦労話をよく聞かされたそうで、その話を中学生の僕に話してくれたのだよ。

その話によると明治十六年の春、晩成社の一員として十勝原野に入植し、粗末な家を建て、開墾を始めると、とたんに野火にやられてしまった。それでもめげずに作物をつくった。土地は良かったので、やがて青々と作物が伸びていった。よかった――と思っていたら、八月の中旬ごろのある日、灼けつくような太陽が朝からじりじりと照りつけていたときだった。昼の三時ごろだったろうか、青空が急に暗くなり、大風が原生林を吹き鳴らすような凄い音が響いてきたので、吃驚して耕作の手をとめて見上げると何だかわからないが黒雲のようなものが頭の上に覆いかぶさってきた。びっくりして大変だと大声をあげて皆に知らせたが、そのうちにぽたりぽたりと大粒の赤いものが一面に降ってきた。よく見ると胴体が大人の人差指ほどもある大きなバッタで、それがみるみるうちに雪でも降るように一面の大地を覆いつくしてしまった。そしてその幾万とも知れぬバッタが、まるで夕立のような物凄い音を立てて、野といわず畑といわず、地上のあらゆる一切の植物を食べ始めた。そのため、せっかく丹精して作った農作物はもちろんのこと、馬の背もかくれるほどに生い繁っていた原野の草も、あっという間に喰い荒らされて焼野原のようになってしまった。人々は金だらいを叩き棒をもって叩き何とかして追っ払おうとしたが逃げるもんではない。しかし夕方になるとバッタたちはどこかへ飛び去っていったので、やれよかった、と思っていると翌日もまたやってきて喰い残したところを荒らし始めた。そこでこんどは火を燃やして、松明をふり廻し、追っ払おうとしたがそれでも退くもんじゃあない。仲間がいくら殺されても平気なんだ。これが鳥なら鉄砲をぶっ放せば、逃げてゆくだろうが、バッタは無神経なのか、逃げようとしない。手の打ちようがないのだ。そこで明日もやってくるかもしれないからと、辛うじて残っていた麦、粟、黍などを夜の間に、必死になって刈り入れ、家や小屋にしまいこんでホッとしていると、こんどは匂いで知ったのか、小屋や家の中まで侵入してきて喰い荒らす。

一方、喰いっぱぐれた奴は、屋根に群がって屋根にふいた藁を喰いはじめる。縄や蓆まで喰う。縄が喰い切られて吊るしてあった棒や、板などが落ちると、その下で何百匹とバッタが死ぬ。家の中に入ったものは、着物や帯、布団など喰ったし、一番、困ったのは便所の中まで入り込んで不浄紙まで喰い、その足で屋内を飛びまわることだったそうだ。

こういったバッタ害が十六年、十七年と二年も続いたために収穫は皆無となって、引揚げる者が出てきた、という



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo